

まざるマル つつむヤネ

～演劇というコミュニケーションツールで未来の多民族社会を育てる「円形劇場こども園」～

演劇という道具、劇場という装置

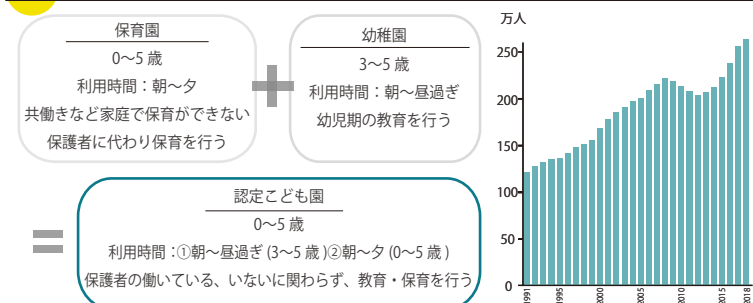
外国人観光客や外国人労働者の増加など
これからの10年で、日本はさらなる多民族化が進むと
予想される。
そんな社会において、自己主張し、相手を許容する力
であるコミュニケーション能力はますます必要とされるだろう。

そこで、多様性を楽しむための道具として演劇を、
その装置として劇場を、こども園に取り込んだ。

日常に演劇が溶け込むことがこども達にとっても、
こども園をかこむ地域にとってもこれからの新しい
多民族社会をつくる力となるように。

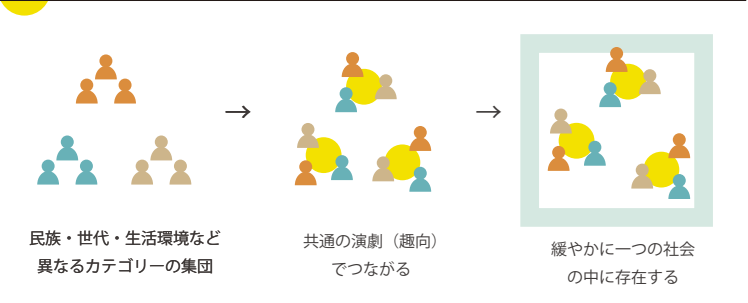


1 多民族化する社会、多様化するこども園



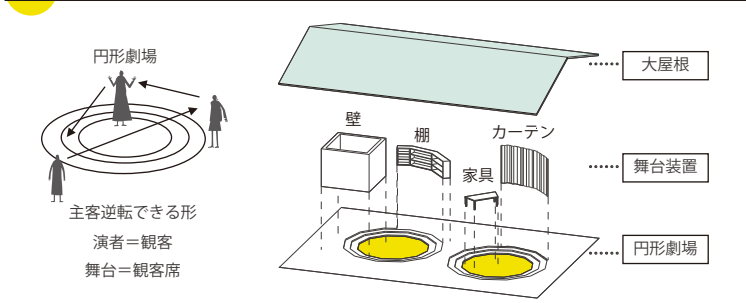
国内の在留外国人の数は現在約263万人(過去最大)、今後も増加するとされる。
また、こども園という制度にかわり、幼稚園や保育園よりも様々な家庭環境の
園児が集まることが考えられる。
多民族化と合わせて、こども園に通うこども達のさらなる多様化が予想される。

2 排除から寛容、みんな一緒から個の尊重へ



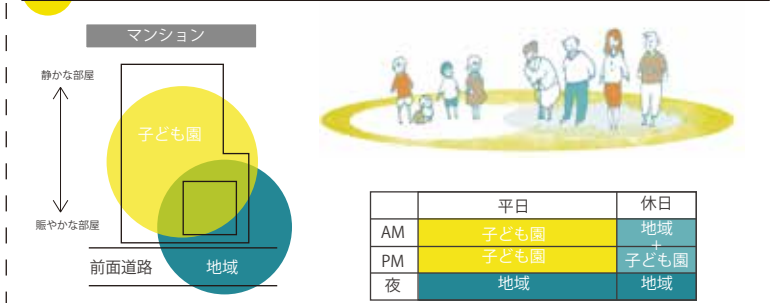
民族や世代でグループを分けるのではなく、共通の好きなものが見つかることが
個の尊重だと考えた。多様な場を園内に配置し、それらを包括するというコンセプト
で建物の形をつくり、違う価値観の存在を排除したり、無理に統合
するのではない寛容さを持ったこども園の空間を提案する。

3 園内全体を劇場空間と見立てる



古代円形劇場のような、円形の階段空間を劇場と見立てる。性格の異なる
円形劇場を園内全体に配置、こども達は自分で好きな劇場を選ぶ。また、壁や
カーテンなどを舞台装置と見立て、こどもでも動かせる家具を置くことで、
こども達が自分で自分の舞台空間をつくるきっかけとする。

4 日常が劇場に、劇場が日常に



道路に面する場所に大きな劇場をつくり道路側を観客席とすることで、道を歩く
人からも園内で遊ぶ園児の日常の様子が演劇の様に感じられるのではないかと考えた。
また、この大きな劇場は“みんなの劇場”として、地域に開放する。こども園と
地域がまざり合うことで、こども園という劇場が地域の日常になることを目指す。

しよくぶつ劇場

花だんでこども達がチューリップを
育てるなど植物と触れ合える場所。

しずか劇場

まだ幼い0歳児が安全に過ごせる
やわらかい素材仕上げ。日光浴も
出来る。

にぎやか劇場

こども園の中心に配置。保育室を
円にかみ合わせることで保育室と劇
場が一体空間となる。お昼寝の時
などは開閉式の戸を開けて部屋を
使う。

よみもの劇場

絵本が置いてあるスペース。まわり
を低い本棚で囲むことでこども達が
好きなくられる場所にした。

アトリエ劇場

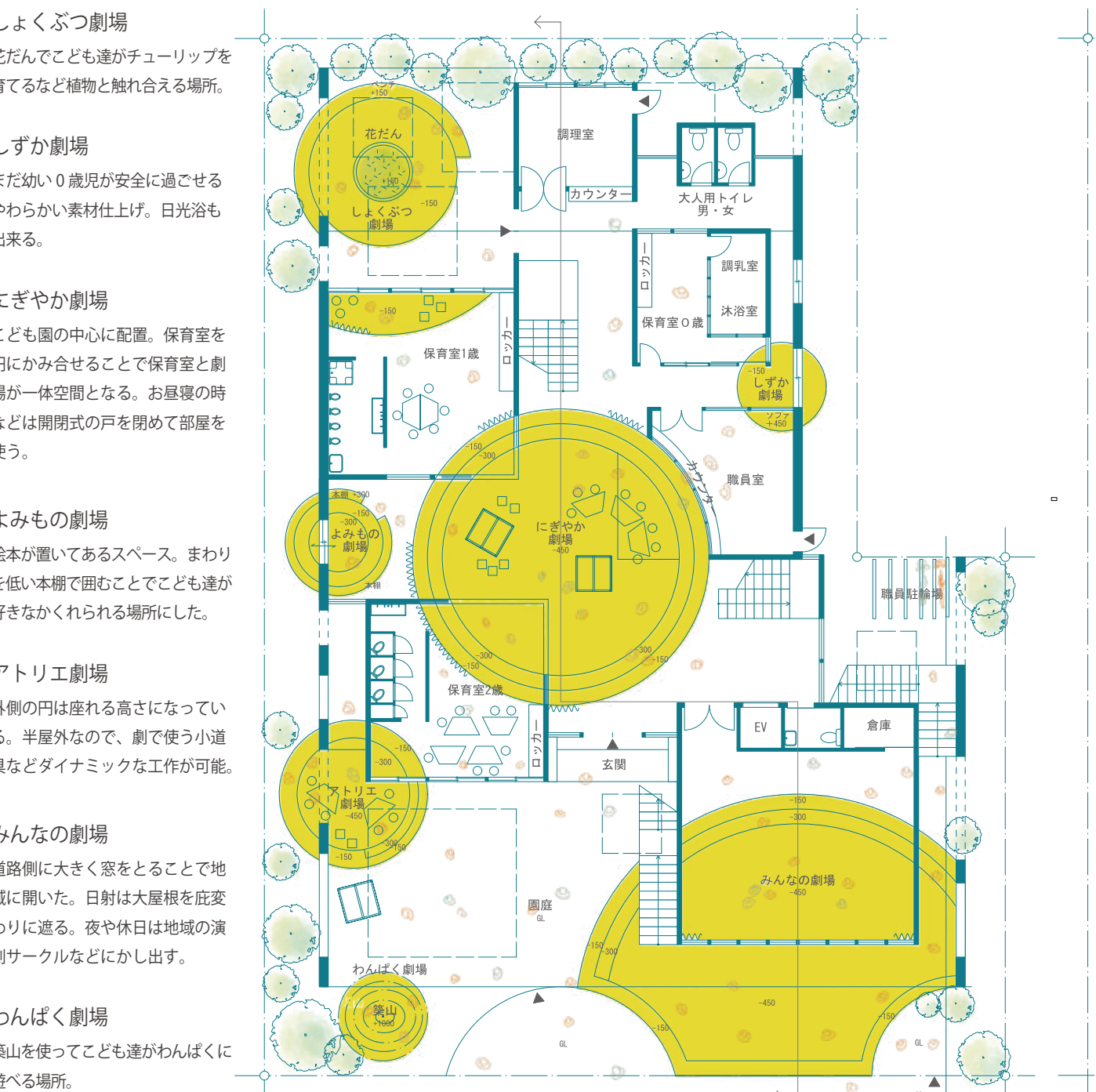
外側の円は座れる高さになってい
る。半屋外なので、劇で使う小道
具などダイナミックな工作が可能。

みんなの劇場

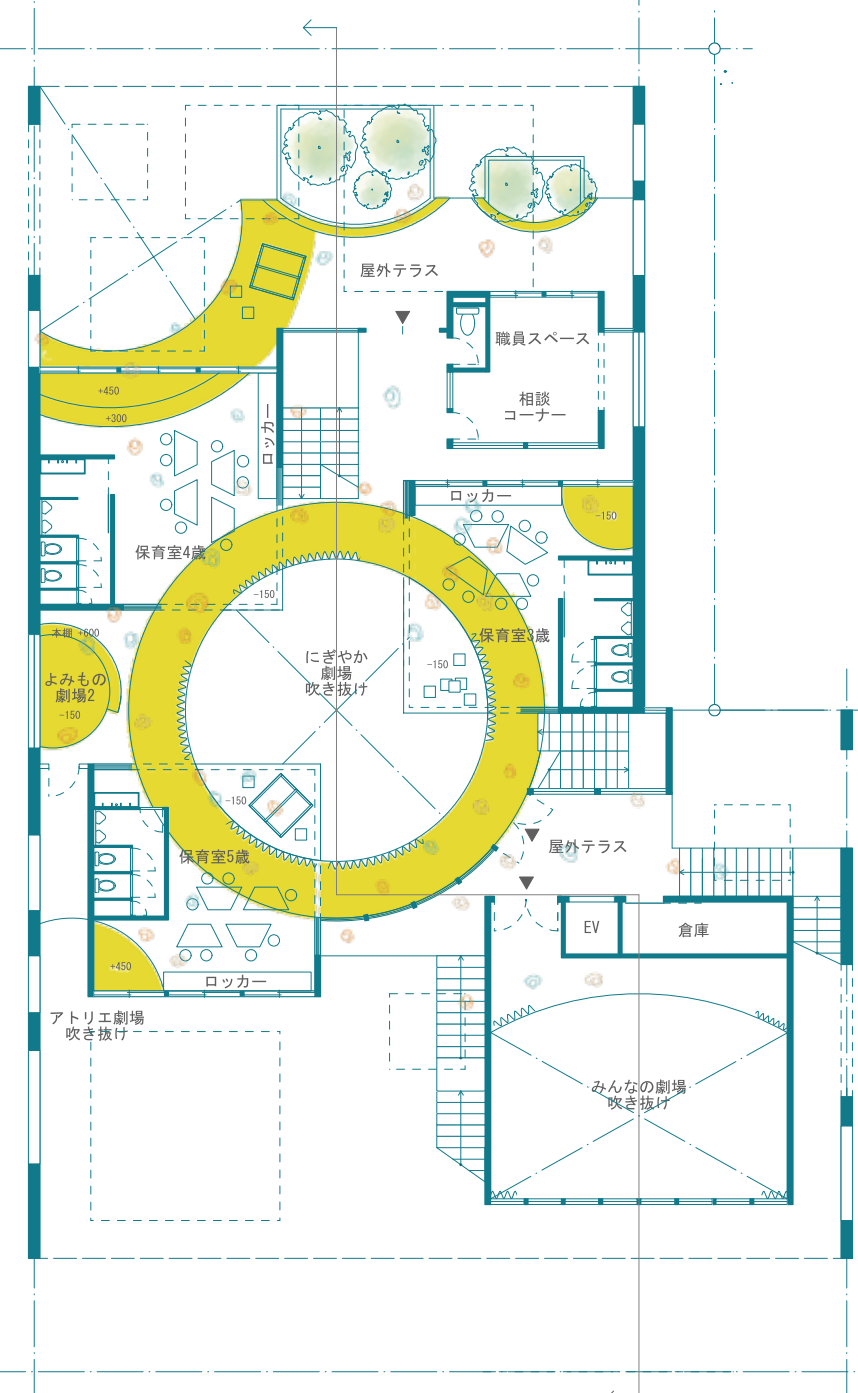
道路側に大きく窓をとることで地
域に開いた。日射は大屋根を庇変
わりに遮る。夜や休日は地域の演
劇サークルなどに貸出す。

わんぱく劇場

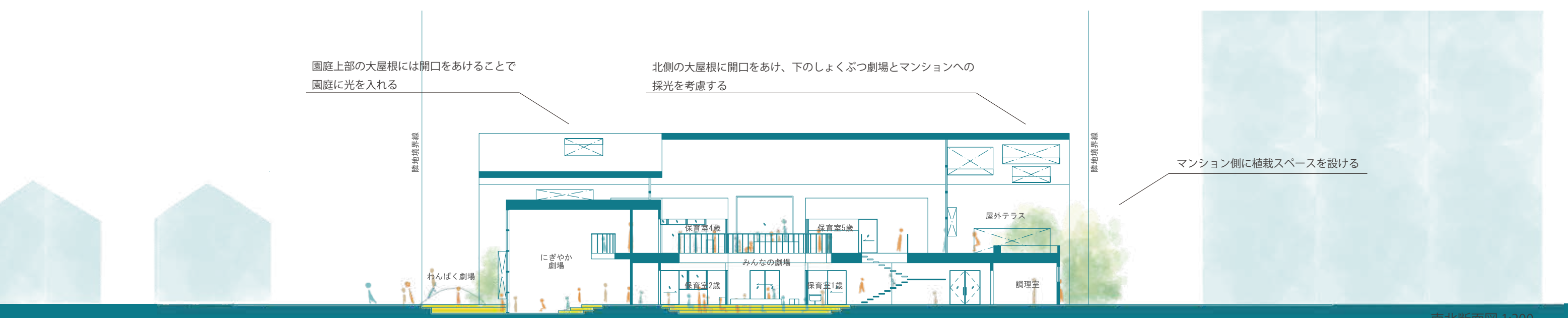
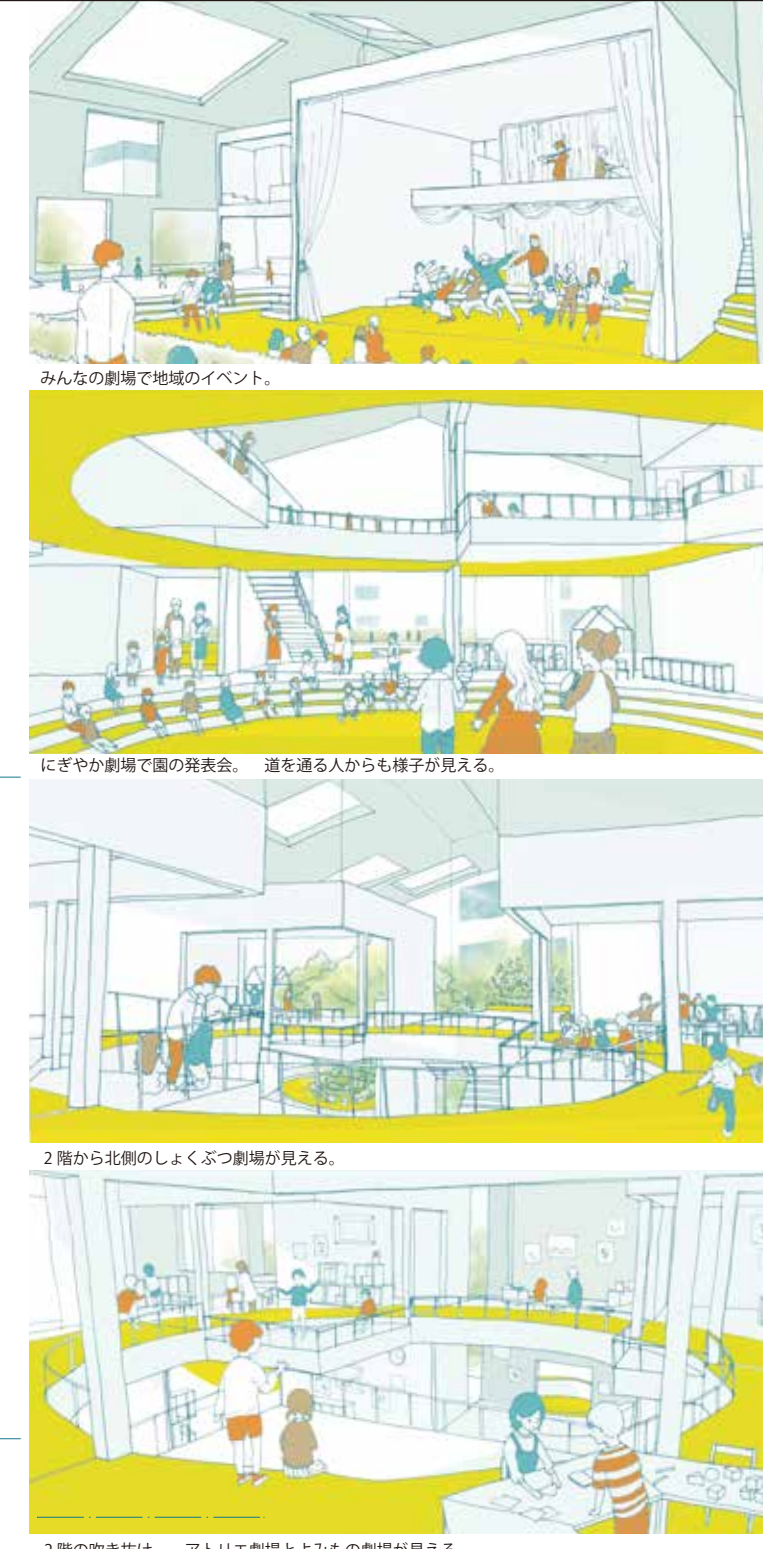
築山を使ってこども達がわんぱくに
遊べる場所。



1階平面図 1:200



2階平面図 1:200



南北断面図 1:200